
「未定」の書

哀妃紗 煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「未定」の書

【Nコード】

N9616V

【作者名】

哀妃紗 煉

【あらすじ】

天使のように優しくかった主人公。しかしある日、母が家を出て行き、家庭環境が一変して悪くなり、人間を理解してしまい、悪魔になろうとした。しかし、主人公は元天使のような人だったため、良心が出てきてしまい、悪事が失敗してさらに悪い方向へと環境が進んでしまう。そんな主人公がある日、「魂転」という能力を授かった。能力を授かった主人公は、世の中を理解していたため、復習を行わず、幸せを得るために能力を使うことにして、幸せを追求して行く物語です。

現時点での登場人物（前書き）

現時点での登場人物です。
更新もします。

現時点での登場人物

登場人物です。

・雪宮 李秋（ゆきみや りあき）本名不明
初恋の人とアクセサリーショップに行き、そこで『魂転こんてん』という力の契約証のようなものを拾い、魂転者となる。

以降、犯罪者を捕まえるバウンディハンターになる。

孤児院などを作り、全国的に有名な権力者で、雪宮 李秋を名乗っている。

魂転者としても危険人物・逆者として有名。

性格は消極的から活発に変わっている。結構適当で直感で動くが、順応性と相手の気持ちを観察するなどの優れた面もある。

昔にいじめなどを受け、その経験を生かし、我流の格闘術を持っている。

・優神 雲母（ゆうがみ きらら）

主人公に最初に話しかけた人物。

行動に謎が多い。

性格は穏やかで優しい。時に天然な面を見せるときがある。合気道などを習っており、主人公でも歯が立たないほど強い。

実は主人公の名前は知らない。

不馬 改人に殺される。

・雪宮 速（ゆきみや そく）本名 城原 美由紀（しろはら みゆき）

主人公の最初の新しい家族。

過去に人体実験を受けており、身体能力は人間以上。主人公よりも早く走れるが、体力がない。

性格は負けず嫌いでツンデレ？自分では胸のことは気にしていないようだが、他人に指摘されると、とても怒る。

特殊訓練を受けており、主人公にも引けをとらないが、主人公に手加減で子ども扱いのように負けることが多い。主人公のことを李秋と呼び捨てで呼んでいる。遠くから呼ぶとき、または怒っているときは秋！と呼んでいる。

・雪宮 桜（ゆきみや さくら）本名 不馬^{ふま} 姫華^{ひめか}
主人公の二番目の新しい家族。

不馬 改人の妹。

性格は天然でドジッ子。料理の腕はそのときそのときで、プロ以上または失敗のどちらかで、普通はない。

語尾を『〜』とのばすが特徴。主人公のことを李秋くんと呼んでいる。

・不馬 改人（ふま かいと）

主人公の最初の強敵。

初恋の優神 雲母を殺した人物。

主人公に強い恨みを抱いており、『お前が養父^{とっ}さんを殺したんだ！』とよく怒鳴るが今のところ不明。

性格は積極的。主人公に会うとだんだんパニック状態になるが、攻撃は的確で主人公は歯が立たなかった。

主人公に封印されるが……？

・天ノ姫 水城（てんのひめ みずき）

片目の『無在』でこの世に存在している。

主人公と不馬 改人との戦いに乱入し、主人公に手を貸す。

自分の名前が女の子っぽいだけ、そこを指摘されることに弱い。

性格はやんちゃで面白い物好き。面白いことを見つけた度に『おもしれえ』と言う。

語尾に母音をつけるのが特徴。

世界の裏側について詳しい。

・戸葉瀬 母音（とばせ ははね）

主人公の師匠。

主人公とは小学生から知り合い。

主人公に「姉さん」と呼ばせたりと結構S。主人公以外にはとても優しい。

相手の行動を次々と読み、それを合気道でいなし、完全に勝利する強者。

魂転により潜在能力が開放された主人公よりもはるかに強い。

自分では主人公をかわいがっているつもりだが、性感帯を刺激することが多いので「いじめられている」と主人公は思っている。

性格は面倒見がよく優しい。お嬢様言葉で話すが、家柄はいたって普通。

主人公の本名を知っている数少ない人物。

・未定願（びていげん）びていがんとも言う。本名不明。

『無在』が人間に寄生する寄生空間に現れる謎の人物。実は女性。世界の裏側を全て知っており、『断言』を打ち破ることに専念している。また、大きなことにかかわっている。もともと『定願』だった。

性格は冷静で上位から見下すような口調。『ククク』と蝉せみのよう

な笑い方をする。

主人公の本名を知っている数少ない人物。

・無在（むざい）本名不明。

主人公と契約している『無在』。

存在と言っ言葉が嫌い。

『無在』の中でも上位に位置し、十三の魔法を全て使うことができ、さらにその上位の魔法も使える。

性格は冷静で冷たい。一人称は私。

主人公の本名を知っている数少ない人物。

・母親 名前不明。一部 ピュフィス・シュタルヴァ

「未定」の書の読み手。

「未定」の書に出てくる人物の一部と知り合いで、元その世界の住民で『呪われた天使』、『五千年後の繰者』。

性格は穏やかで優しい。『あの人』と呼んでいる夫をととても愛している。

が、他に『あの人』とお似合いの人物があり、奪ってしまったと後悔している。

・プペルアラ・デヴィル・シュタルヴァ 愛称 プペル プラ。
母親の娘。

母親と同じく『呪われた天使』、『五千年後の繰者』。

性格は元気で活発。本を読まないとなかなか眠れず、一日中起きていることもある。

・あの人 名前不明 一部 ノヴァ・シユタルヴァ
母親の夫。

・代ハラ（しる はら）
あの人と結ばれ続けるはずだった人物。

・カミ・シャ・ドロクス
未定願の唯一業火をうけて死ななかったもの。

・鋼峰 紀美夜（こうみね きみや）
主人公の学校での数少ない友達。
よく男子と一緒にいることが多いが、男子からは少しうざいと思わ
れている。

主人公とは入学した日に会っており、自分の名前と同じ部分がある
ことからよく絡むようになった。
性格は元気で明るい性格。
主人公のことをゆ・きみやくんと呼んでいる。

・真田 油介（さなだ ゆすけ）
主人公の数少ない友達？

誰にも等しく接しているが、会話をしてくれるのは主人公と自分の
姉のみ。（両親は海外に行っており、姉と生活している）
主人公が『サラダ油』とあだ名をつけて以来、みんなに、姉にもそ
う呼ばれるようになった。

しかし、自分に話しかけてもらえるので、あまり気にしていない。
姉のことが大好きなシスコン。主人公によって暴露される。

用語

・天使（てんし）
神に仕えるもの。

存在するものの善に存在するもの。
ミスや神への反抗で墮とされ、墮天使となる。
墮とされるとミスのは記憶を消され、人間として暮らし、
反抗したものは悪魔になる。

・悪魔（あくま）
魔族と神に反抗した墮天使。

存在するものの悪に存在するもの。
魔族はもともとから存在するもので、主に吸血鬼や狼人間や猫又などが
いる。（『神の打倒』を読んでいる方は魔族がいる理由がわかるは
ずです）

墮天使は契約で人間に力を与える。

・魂転（こんてん）
魂を吸収・与えることができる能力。
他に身体能力の超強化、魂転者・魂転の知識を持つものの殺害又は
自殺以外では魂のある限り死ぬことはない。（ゾンビのような存在
になる）

天使に関係しており、契約の際に自分の存在と似た存在の天使が守
護する。

・魂転者（こんてんしゃ）
魂転の能力を持つもの。

・解魂（かいこん）
魂転者が魂の10年分を強化し、100年分にする。 （攻撃を
つけた際に吸収される量をマイナス10倍にすること。 実際に魂が
増えるわけではない）
その100年分がなくなると元に戻る。

・無在（むざい）
どこにも存在することが許されていないもの。
故にどここの空間にも存在できる。
自分が入るに相応^{ふさわ}しい器の人間と契約をし、初めて存在が許される。
契約した人間は魔法が使えるようになる。
十三の魔法を使う。

- ・十三の魔法（じゅうさんのまほう）
無在にしか使えない13個の魔法。
- 1 対象の敵とのゼロ距離に魔力を発生させ、攻撃する魔法
 - 2 身体強化魔法
 - 3 触れたものを吹き飛ばす魔法
 - 4 触れたものの魂を全て吸収する魔族召喚魔法（吸収された魂の
9割は無在に与えられる）
 - 5 空間移動魔法（空間を移動する前後に黒い煙を出す）
 - 6 全ての系統を持つ光線を放つ魔法
 - 7 無属性の追尾効果のある弾を複数放つ魔法
 - 8 術者の負の感情でできた魔族を召喚する魔法（その魔族に触れ

る又は攻撃を受けると術者の負の感情が流れ込む。

9・術者の負の感情を自分中心に広げる魔法（魔力を通さない＝魔法を無効化する）

10・光の速さで5の魔法の弱いものを放つ魔法（詠唱時間が必要）

11・負の感情を放つ魔法（術者のものではない）

12・666の悲劇（1→11の魔法を一度に放つのを666回繰り返す魔法。詠唱時間が最低一日かかり、詠唱中は他のことを考えてはいけない）

13・触れたものの存在を消す光を放つ魔法（光のスピードは遅い。存在を消されたものは記憶なくし、無在になる）

・定願（ていげん・ていがん）

願いを叶えるもの。

存在するものの希望・夢に存在するもの。

存在するものの希望や夢を見ることができ、それを叶えるとき迷いがなければその願いは叶えられる。（自分の願いも制限はあるが叶えられる）

主に死にたくないという願いを叶え、寿命では死なない。

あるきっかけで未定願になる。

・未定願（びていげん・びていがん）

定願とは違い、迷いがあっても願いを叶えることができる。

未定願になるのは極めて稀で、主人公の中にいる未定願が初めての未定願。

・魔法と式法

魔法は内に魔力を持つものが使う魔法で、炎系統・水系統などがある

る。

式法は知識があれば使える魔法で、詠唱時間が必要だが詠唱時間が長いほど強力というはけではなく、知力によって詠唱時間はかわり、その人の必要最低限の詠唱時間+それ以降の詠唱時間で強力になる。魔法と違い式法一つに一つの魔法しか使えない。

例・炎系統で魔法なら火炎放射・火球など色々使える。

式法は炎系統でも火炎放射と火球に分けられ、それぞれ詠唱時間が必要。

プロローグ

ねえ、お母さん。

どうしたの？

本を読んで。

ごめんね。もう本は全部読んじゃったわ。

ええー。

あ、でも「未定」の書ならあるわよ。

みていのしょ？

そうよ。この本はね、読みたいって祈ってからじゃないと本文が出てこないの。

どんなお話になるかわからないから未定なの？

そうよ。それと、この本の文章は今他の世界で起きてるお話なのよ。

へえー、すごいね。

この本でいい？

うん。その本を読んで。

じゃあ、読むわよ。

うん。

影天使は動き出す（前書き）

オリジナル神話なので、普通の意味とは違う意味の存在があります。

例：普通は墮天使 神に抗う者 悪魔が墮天使 墮とされた天使。

悪魔 神に抗う墮天使。

影天使は動き出す

母が家を出て行ってから悪く変わってしまった家庭環境。自殺しようかとも考えたこともあった。でも、何とか耐えることができた。

それは、優しい友達ができて、その人に会うのが楽しかったからだ。その理由は、無口な性格で友達のいない僕に接してくれたからだ。た。

その人は、ゆうがみ優神 きい雲母という女性で、友達が少ないこともなく、むしろ友達は多かった。そんな彼女の見える笑顔は、まるで天使のようだった。

彼女と出会ってから約半年、僕の人生が大きく変わる日が来た。それは、彼女とある日アクセサリーの店に行った事から始まった。

「ねえ、あの店に行きましょう」

優神さんが普段寄り道をすることはないのに、そう言ってきた。

どうしたのだろう?と思った。

僕は無口な性格なのでうなずいて答えた。

そして、二人でアクセサリーの店に入った。

その店は年寄りの女性が一人で経営している店だった。

彼女はアクセサリーに興味がなさそうに見えた。

そこら辺をうろろろしているだけで、アクセサリーを見たりはしていないかった。

そんな彼女を不思議そうに見ていると、あなたもアクセサリー探してみたら?と、にっこりと微笑んで言ってきた。

そして、僕もアクセサリーを探していると、なぜかとても気になる

キーホルダーがあった。

それはビー玉ぐらいの大きさで、何か奇妙な文字が一文字書かれていた。

僕はそれを買おうと思い、値段を確認するため、手に取った。だけど値段が書かれていなかった。

「値段、聞いてみたら？」

彼女は僕がこのキーホルダーを買うのを知っていたかのように言ってきた。

そして、彼女の言うとおりに値段を聞いてみたら、それは店の物じゃないから、もって行っていいよ。と言われた。よかったね。と近寄ってきた彼女がそう言った。

まるで結果がわかっていたようで、あまり感情のこもっていない言葉だった。

そして、僕にもおかしなことがある。

それは、彼女とかかわった出来事がすべて前にあったような気がする、デジャブが起きる。

店を出ると彼女は何も言わず、笑って手を振って先に帰って行った。

そして、僕も家に帰って、いつものように食事をして眠った。

「……………」

突然なんとも言えない痛みが体中を襲った。

そして、意識がもうろうとしてきて、気絶した。

それから夢を見た。

それは青白く輝く光の中で、何かの音が聞こえてくる夢だった。

その声は

「大いなる悲しみ・憎しみを持つ墮天使よ、『魂転』の力を授けよう。そして、その力を好きに使うがよい」

と、何度も言っていた。

夢から目覚めて、あたりを見渡すと、昨日店で買ったキーホルダーが青白く光っていた。

なんだ……これは？僕は普通怯えてしまう状態なのに吸い寄せられるようにその光のところに近寄った。

そして、そのキーホルダーに触ってみると、今度は不快感を感じた。そして、またあの声が聞こえた。

「『魂転』の力は、肉体をただの魂の器にする。器になった肉体は、感じたくない五感を感じなくなり、代わりに不快感を感じる。そして肉体は再生能力が上昇し、潜在能力を発揮することが可能になる」

と、言っていた。

つまり、ゾンビになるということだろうか。

力を手に入れたと思うと、僕は固く閉ざされた口を開いた……。

「ようやく、影天使が行動できる……」

はい。今日はこちらまでよ。

ううー。続きが気になるよー。

じゃあ、早く寝なさいね。

……うん。あ。

どうしたの？

こんな不思議なこと、本当に起こってるの？

あらあら、私たちは『ごせんねんご五千年後のそつじや線者』なのよ。
よくわからないよう。

まだ初めてだから仕方ないわね。さあ、早く寝なさい。
はい。

影天使は動き出す（後書き）

オリジナル神話なのでわからない名前があるのは当然なので、後書きで説明しようと思います。ストーリーに大きくかわる名前の説明はしません。

影天使について

- ・影で見守り、助ける天使。一番知られていない天使。
- ・「影天使が動き出す」は知られてはいけないのに、知られようと
する禁忌を犯すということ、もちろん墮とされますが、墮天使にならず、影天使のままです。人間では影での人への努力が自分の力になり自分を主張出来るようになるの意味。です。

魂転契約の呪い

僕は昔から神や天使や悪魔を調べていた。

そして、僕は天使の影天使にあたる性格だったため、影天使の契約文を書いて、報われる日を待っていた。

そして、その夢が今叶った。

『魂転』という力を手に入れたからだ。

『魂転』は天使に関係していて、それぞれ能力が違うらしい。

天使には、影で助ける『影天使』

祈る者の前に姿を現し、助ける『光天使』

亡霊をあのに導く『死天使』

他にも『滅天使』、『雨天使』、『王天使』が存在し、すべての天

使に共通する称号があり、墮とされた天使『墮天使』、呪われた天

使『五千年後の繰者』がある。

魂転という力が本当に僕にあるのかを調べるため、実験をした。

最初は恐る恐るやっていたが、力があると自身を持ち始め、恐れをなくした。

感じたくない痛みは感じないということにはわかったため、次は再生能力の実験をしたところ

切断しても取れることはなく3秒ほどで再生することがわかった。

この力で、自分にとって利益のあることをするには……。

そう、考えていると、驚異的な身体能力を使つて、指名手配犯を捕まえることに決定した。

早速、街中を出歩くと、みんなが奇異の目で僕を見ているのがわかった。その理由は背中に背負っている刀だった。

いつからこんなものがあつたのだらう。

と考えながら、刀を手にとると、またあの声が聞こえてきた。

「その刀こそが『魂転』の真の力を発揮させるものであり、それは人の魂を吸い取ることで、人に分け与える力だ」

と、言っていた。

一度に全部教えてくれないのか？と少し呆れ、人通りの少ないところを歩いた。

なぜか不快感が感じられた。あたりを見ると自動車は止まっただけで、人もいなくなっていた。

何だこれは……！？

「やっと見つけたぜ。魂転者！」

驚いていると、後ろから声が聞こえた。

振り返ると、黒い着物を着た男性がこっちを見ていた。

「ん？初めてか？でも俺は手加減しねえぜ！」

そう言うと、男性は飛び掛ってきた。

うわっ、なんだ！？

どうやら彼も魂転者のようだ。

彼の行動から大体の状況とルールを理解した。

今の状況は魂転者同士の魂の奪い合いで、ルールは一定範囲内の同じ空間を作り

元の空間に被害が出ないように、その空間で戦うらしい。

「ちっ、すばしっこい奴だぜ」

僕は何とか攻撃をかわして相手の隙をうかがった。

僕は我流の拳法を持っていたから、そこら辺の不良達に襲われても

大丈夫だったけど、この男性は大丈夫じゃない。
なぜなら僕はまだ驚異的な身体能力を持つ者同士の戦術はないから
だ。

「ククク……。やっぱり初めてだったか！そりゃあ『かいこん解魂』できね
えよなあ？」

かいこん？　そういえば男性は着物のような服を着ている……。
ああ、まったくわからない。
少し諦めかけたそのとき、あの声が聞こえた。

「刀を握り、祈れ」

……。やっぱり一度には教えてくれないようだ……。
多少ム力つくけど、やってみるしかない。
そして僕は刀を握り、何を祈ればいいかわからなかったが、『負け
たくない』と祈った。
すると、青白い光が体を包んでいき、光が消えて見てみると、着物
のようなものに着替えていた。

「何！？　初めてじゃないのか！？　まさかおまえ……。墮とされた影……」
「だああああー！！」

僕は大声を上げて斬りかかった。
気がつくと、男性は消え、元の世界に戻っていた。

「墮とされた影？」

僕はあの男性が最後に言った言葉が気になった。

はい、おしまい。

ねえ、お母さん？

どうしたの？

五千年後の繰者つて最初の方に出てきたけど、私たちと同じ人？

そうねえー、元々私たちがいた場所の出来事なのかもしれないわね。

元々の場所？

その話は明日しましょうね。

はあい。

怒り……

僕は初めて戦ったあの日から力について考えていた。

力について整理すると、力が最大限に発揮できる場所は

元の空間を一定の範囲コピーした、別空間で、

発揮するには、その空間で『解魂』を行はなければならない。

『解魂』は自分の魂の10年分を10倍にして、100にすることでできる。

また、100が尽きると、元に戻ってしまふ。

つまり、戦いではその100を尽きさせて元の状態になったところを攻撃することが必要になる。

あとは自分が持つ武器を使うことで100が少しずつ元に戻っていく。

大体のことはわかったがああの男性が言っていた、墮とされた影はただわからない。

どういうことだろうか……。

「何考えてるの？」

あ、考え事をしていて優神さんと一緒に登校しているのを忘れていた。

「昨日は学校休んでいたけど、何かあったの？」

僕は首を振ってなんでもないと答えた。

これからは学校を休むことが多くなりそうだ。

しかし、指名手配犯を探すことは難しい。

力のおかげで負の感情を持つ者や魂転者を察知することは出来るけど。

犯罪者以外にも負の感情を持つ者はたくさんいる。

これは時間がかかりそうだ……。

それからニュースやネットで調べていると

犯罪者の過半数は魂転者だった。

ということ、魂転者を探せばいいということだ。そして僕は学校をしばらく休み、魂転者を探した。

魂転者探しを始めてから2ヶ月

指名手配犯は意外と簡単に見つかり、警察からの報酬でだいぶお金が集まった。

たくさん魂転者と戦って気づいたことは

僕は他とは違い、拳や刀に青い光をまとっていることとその光は良心の光で、自分の欲望のために使うのではなく正義のために使っているかららしい。

そして、2つ噂になっていることがあるのがわかった。

1つは、闇をまとっている化け物がいると言う噂。

2つ目は、魂転者のギルドが最近できていると言う噂。

そして、僕は魂転者の間で反逆者として

謎の正義者として一般では有名になった。

僕がその謎の正義者とバレていない理由は

僕は元の空間でも『解魂』を行うことができるのと

『解魂』を行うと容姿が変わるからだ。

そうして集まったお金で孤児院を建てた。

久しぶりに学校へ行った。

僕を覚えている人は優神さんしかいなかった。

僕は学校の授業についていけず、途中でサボった。

優神さんはそんな僕を心配して何度も授業に出たら？とやってきたけど僕は大丈夫と言って、サボった。

優神さんは僕が初めてしゃべったので見逃してくれた。

そして、学校は終わり優神さんと一緒に下校した。

優神さんはなぜか怯えていた。

何かに怯えていた。

そして、僕に手紙を渡して、帰ったら読んでと言った。

僕がその手紙をポケットにしまったとき

優神さんは宙へと飛んだ。

僕は驚いて声が出なかった。

優神さんは何かに当たって飛んだということが理解できて

飛んだのと逆の方向へ振り向いた。

すると目に入ったのは、笑いながら僕を見ている

着物を着た同い年くらいの少年がいた。

僕はまた驚いた。

少年は『解魂』の状態でいたからだ。

少年は笑い終わると。

「俺は不馬改人^{ふまかいと}。今は精神的にショックを受けているから見逃して

やる。……お前はぜったいに許さない！」

と、言つて、去つて行つた。

僕は正気に戻ると、優神さんのところへ行つた。

見てみると、優神さんは死んでいた。

僕はそれが信じれなくて、何度も揺さぶったり呼んだりした。

でも、もう起きない。

そう理解した。

「うううああ……ああっ……うああああああああああ……

……！」

お腹が痺れるほど叫んだ。

さつきまで生きていたのに……！もう動かない……。

叫び終わると、怒りがこみ上げてきた。

「……不馬改人、絶対に許さない……！」

今日はここで終わりよ。

なんかとてもかわいそうだね。

そうねえ……、愛する人を失うのは悲しいわね。

お母さん。昨日の話は？

あ、それはね、今私たちがいる場所はね、お父さんが作った場所なの。私たち天使がいたのは地球と言う場所なのよ。

へえー、そうなんだあ！

話は終わりよ。もう寝なさいね。

はい。

影天使は正しい道歩む(前書き)

今回は主人公は出てきません。

影天使は正しい道を歩む

万華鏡の中のような空間に男が二人いた。

「ククク……姫が死んだか……」

男がつぶやいた。

「ん？誰だ。ここは私しかいないはずだが」

その男にもう一人の男が近づきながら言った。
すると男は妙なことを言った。

「久しぶりだな『無在』……いや、初めましてというほうが正しいか？」

「誰だと聞いている」

『無在』というもう一人の男は聞き返した。
しかし、また妙なことを言ってくる。

「ふむ、俺か？好きに呼べ」

「ふざけているのか？」

『無在』が冷静に言い返すと
男は別の話を始めた。

「今回は『母体』と聞いているが、どうなるだろうな」
「何を言っている」

『無在』は男に聞くが、男は話をやめない。

「彼が失敗をしなくても他が失敗すれば意味は無いな」

男は額に手を当てながら『無在』の方へ振り向いて尋ねた。

「『無在』、お前もこいつの契約者だろう？何か思わないか？」

「……さあな、こいつは『影天使』だということはわかるが」

「そうか……。ククク……。何度聞いても同じか……」

そう言うと男は額に当てていた手を下ろし
上を向いた。

『無在』は男の言葉が理解できず

その男を黙って見ていた。

すると男はつぶやいた。

「ふむ、初めての反応だな」

『無在』は妙な事ばかり言う男にもう一度聞いた。

「お前は誰だ？」

すると男は上を向いていた顔を『無在』に向け
答えた。

「さつき言っただろう。……ふん、人間と契約を結ばなければ何も
出来ない存在が俺にそんなことを言えるのか？」

「なっ」

『無在』は後退りをした。

すると男は近づきながら自分のことを言った。

「俺はお前達とは違う。お前達みたいな天使でも悪魔でもない奴『無の存在』とは違う」

「じゃあ、お前は何だ私達『無の存在』と同じじゃないのか？」

「俺はお前達のように名前は無いが『定願』という部類に入る者だ」

男の発言に『無在』は混乱し頭を抱えた。

男は止めを刺すように『無在』に言った。

「神や天使は善に存在する。悪魔は悪に存在する。しかし『無在』は何にも存在するところが無い」

『無在』は混乱しながらも対抗した。

「お前はなんだ？お前も私達とは違うだけで存在するところはないのだろう？」

しかし対抗はあっさり意味をなくした。

「俺『定願』希望や夢に存在する。……が俺は事情により『未定願』となったが存在するところはある」

「くっ……」

『未定願』は言い終わると後ろへ向き歩きながら『無在』に言った。

「俺達で争っても意味は無い。今は『不馬改人』が邪魔だ」

今日の分は終わりよ。

今回のは何だったの？

うーん、それはたぶん契約者じゃないかしら。

へえー。

私は何を言いたいかわかるかしら？

うん！もう寝なさいでしょ。

うふふ。じゃあまた明日ね。

うん。おやすみなさい。

五千年の約束

優神さんが死んでから一年。

優神さんがくれた手紙には

『五千年後にまた会おうね』と書かれていた。

よくわからなかったけど、その約束を守ることにした。

あれから僕は不馬改人を探し続けている。

しかし、見つかる以前に情報すら全くない。

この一年間で得た情報は二つだけ。

一つはギルドに所属していること。

二つ目は妹がいること。

二つ目は意味のない情報だ……。

ギルドに所属していると言っても

ギルドはたくさんあるからわからない。

今確認できているのは五つだけだ。

ギルドの他にもグループと言う集団があり、

情報はあまり役に立たない。

ギルドとは50〜100人以上の組織で

ギルドに入っていると、自分が死んだとき、

助けてもらえるなどプラスの面がある。

ただし、他が死んだとき、魂を分けなければならぬ。

僕にとっては殺しても蘇って、また魂を大量に奪うから

厄介な組織だ。

そしてグループとは3〜10人程度の集団で、

群れて魂転者を襲ったりする。

厄介だがギルドとは違って死んでも助けることはない。

僕は何度も襲われたが、何とか勝つことは出来ている。

しかし、ギルドでも群れるギルドが最近出来たらしく、

そのギルドに会ったら僕は死んでしまいかもしれない。

「今日は曇りか……」

僕はそうつぶやいて不馬改人を探しに外へ出た。

光が射す隙間もないくらいの曇り空。

僕の体は日光に弱い。

視力の低下、体力の消耗など体に異変が起きるから

曇りは僕にとってはいい天気だ。

この異変は魂転者になったからではなく、生まれつきのものだ。

「はあ〜」

ため息をして空を見上げた。

すると、雨が降ってきた。

その雨は強く、勢いよく、でも小粒で痛くなく、むしろ優しくかった。

「まるで僕みたいだな」

強く必死に幸せに向かって走っても届かない……。

僕は雨に親近感を感じた。

雨は一番好きな天気だ。

なぜか力がみなぎってくる。

雨は急に大粒になり、ザーザーと音を立てる大雨になった。

雨に気をとられていて気づかなかったが、

周りに大量の負の感情があり、迫っていた。

群れるギルドが来たらしい。

いくら僕が青い光を持っていても、

100人以上はさすがに勝てない。

「約束……守れそうにないな……」

もう終わり？

そうよ。もう終わり。

じゃあ、もう寝るね。

そうね、もう寝なさい。

うん。知に溺れるといけないもんね。

……おやすみ。

(……) やっぱりあの子ね。

『知に溺れる』って考えつくなんて(

片目の無在

「くっ……」

群れるギルドに襲われて十分。

必死に戦っているが、勝てる気は全くない。

「らあああああ！」

刀を左斜め下から右斜め上へと振り上げる。

しかし、相手の体制を崩せない。

相手は訓練しているようで、連係がすごく、

一対一ならたとえ少林寺拳法家でも勝てるが

大人数しかも100以上は無理がある。

相手の作戦は弱い一撃を何度も当てて徐々に魂を奪っていく戦法だ。

一瞬の隙を突かれ一撃を確実に当てられる。

そんな状況下で十分も耐えられるのは僕だからだろう。

僕の戦法は相手の攻撃を読み、隙を突き攻撃する戦法だ。

だから相手がどのように攻撃を仕掛けてくるかはわかる。

しかし、よけれないものはよけれない。

右、上、左右からの三連続フェイント、左からの斬り上げ……

わかっていても避けることも、防ぐこともできない。

自分で編み出した戦法は合気道に近い。

優れた直感力があれば最強といえるだろう。

だが複数では無力だ。

だから僕は複数でも対応できる戦法を考えた。

それを試すときは多分今だろう。

僕は少しかがんで左に回転して、365度の範囲内にいる

全ての相手の攻撃をいなし、カウンターを当てた。
そして青い光をまとい、それを回転しながら放った。

「よし……」

「ククク……やるな流石『墮とされた影』と言った所か？」

掛けられた声は聞き覚えがあった。

恐る恐る声の方向へ振り向くと、不馬改人ふまかいとがいた。

「お前よくも優神さんをおおおお！！！」

怒り狂って攻撃を仕掛けたが、あっけなく避けられた。

「殺したのは復習だよ。覚えていないのか？」

俺の養父さんを殺したことを！」

「なっ何だと？」

「忘れたのか！？二年前にお前が殺したんだ！」

「何を言っている！僕がこの力を手に入れたのは

お前と出会った少し前だ！」

「嘘を吐くなああああ！確かに養父さんは言ったぞ！

雪宮李秋ゆきみやじあきと名乗るやつにやられたってえええ！！！」

「バカな！？僕がその名を名乗ったのはつい最近のことだ」

「嘘だあ嘘だ嘘だ嘘だああああ！！！」

彼が叫んだことから察した。

もう話は通用しない……。

不馬改人との戦いが始まって二分。

一気に追い詰められた。

「対一なのに！攻撃は読めるのに！攻撃がかかせない！？」

「もうダメか……」

そう思ったとき、上方向から何者かが落ちてきた。

「ハハハハあははははあー。面白い事やってんじゃねえーか。お前ら強そうだなあ？どつちも殺つちまおうか？

……いや強い方を殺つてやるぜえええ」

その男は左目に眼帯をしていて、右目は爬虫類のようだった。その男は不馬改人に襲い掛かったかと思えば、こちらに振り返り、不気味に微笑んだ。

「こりやまた面白いなあ。お前『無在^{むざい}』との契約者だろ？」

何のことだ？と口は動いたものの言葉にはならなかった。

「へ〜もう一つ面白いじゃねえかあああ。

自覚なしとはなあ！お前最高……ん？」

「邪魔をするなああああ！！」

男が話している隙に不馬改人が男に斬りかかった。

どうやら不馬改人は刀の二刀流のようだ。

しかし、男は指先一つで遠くまで吹き飛ばした。

「何びびってるんだお前？魂転者は魂にダメージ与えねえと意味ねええんだぜ。それよりお前、複雑に魔力が絡みついていやがるぜえ。こりやあ、たくさんの魔方陣、契約書書いてるだろ？だから自覚がねえってか」

男はこちらが答える間もなくしゃべり続けた。

言っていることは意味不明だが、
僕が『無在』との契約者だということはわかった。

「ん？お前まさか……呪われた天使とまで契約してるの……か？」
「……どういうことだ？」

「なるほどごりゃあ、さらにおもしれえなあ……、
だが危険すぎるなあ。お前、絶対五千年後まで二回死ぬなよ！」

また五千年後……一体どういうことなんだ……？

終わりよ。

ねえお母さん？

なあに？

『未定願』ってなあに？

さあ私にもわからないわ。

そうなの？

そうよ。ごめんね。

いいよ別に。じゃあおやすみなさい。

おやすみ。

（『未定願』彼はまだこの世にいるかしら？）

無在

「どういうことだ？」

僕は男に聞くと立ち上がり、服についた砂をはらった。

「ククク、俺もよくはわからねえ。……が『無在』についてならよおくしってるぜえ」

男は呪われた天使についてはよく知らないらしい。

呪われた天使？どこかで……あ！確か『五千年後の繰者』……。確かに詳しい情報はない。

そのことには諦めて『無在』について聞くことにした。

「『無在』とは何だ？」

「ああ、『無在』ってのは、どこにも存在が許された場所がねえやつのことだ。

だから『無在』は人と契約して人間の存在の中に存在する。どちらかというとな、人間が頼んで契約するんじゃないで、『無在』から契約を要求される。と言ったところだ」

「じゃあ、どうやって契約するんだ。僕は要求された覚えはない」

そう訴えると男は眉間にしわを寄せた。

「……頭はいいみてえだなあ。まあ、お前はいくつもの魔方陣・契約書を書いているからなあ、稀だか契約書を書いたときと偶然同時に要求されたってことだ。

……『無在』と契約して悪いことはほとんどねえ。潜在能力を少し開放してくれるし、弱い魔法も使える。お前が青い光を放てるの

はそのおかげだ。悪い点は強い負の感情を感じると意識を乗っ取られる可能性があるだけだ」

男の言っていることは理解できた。しかし、強い負の感情を感じても『無在』に意識を乗っ取られたことはない。そこが一番の疑問だ。

「僕は意識を乗っ取られたことはない……」

下を向きつぶやいた。

「それはだなあ、お前が『五千年後の繰者』と契約しているからだ」
「……!？」

「そいつと契約すると死ぬ可能性が減るからなあ。……だから、意識を乗っ取られると高確率で死ぬんだよ」

「なるほど……」

「……言い忘れてたが俺は『無在』だ」

「何!？」

「無在!?!?……『無在』はどこにも存在できないんじゃないんじやさか。」

「ククク、わかったみてえだな。そう俺は乗っ取られていた」

乗っ取られていた?ということとは『無在』じゃないのか?…ああ、変な気分だ。

「俺は乗っ取られていた。つまり俺は乗っ取られてから逆に乗っ取ったって訳だ」

そう言うことか……。納得はし難いがそう言うことなのだろう。

「……という訳でだなあ、お前に協力してやるぜ。じゃあな。……
ああ、忘れてたぜ、俺の名前は天ノ姫てんのひめみさぎ 水城だ」

男はそう言うのと去っていった。

気がつくくと元の世界に戻っていた。

……天ノ姫水城。何故かそいつと戦わなければならないような気がした。

*

「ほう、もうあいつと出会ったか……。今回は早いな」

「……『未定願』、また来ていたのか」

「お前はこんなところで楽しいか？」

「……契約する前よりはな」

「まあいざれお前はこいつを乗っ取ることになる。任せたぞ」

「任せるだど？お前がやればいいではないか」

「俺にはできない。ちよつとした誤作動でな……」

「お前……いや、任せるとはどういうことだ？」

「お前にこいつの命を任せると言うことだ」

「乗っ取ったときに殺すなど？」

「そう言うことだ。……あとみんな誤解しているが俺は女だ」

「！？……どういうことだ？紹介でも『男性』とされていたハズだ」

「何のことだ？……そう言うのは『真しんの真しんの神かみ』に言ってくれ」

「……もういい」

「ククク、頼んだぞ」

はい、終わり。

『未定願』が女性だったのはびっくりしたね！

うふふ、そうね。

……おやすみなさい。

おやすみ。

(どうしたのかしら？それより彼はもともと女だったのは本当みたいね)

カナシミナド モウ…… (前書き)

第一章はこれで終わりです

カナシミナド モウ……

天ノ姫水城が去ってから、一人雨の降る中で空を見上げて立っていた。

「『雨天使』でもさまよっているのか……」

つぶやいてから家へ向かった。

帰りたくない家に帰る。

帰ってくるのを待つ人はいない。

自分の力を過大評価していた。不馬改人は強い……しかし天ノ姫水城はもつと強い。

まだ他にもたくさんいるのだろう。

そんなことを考えていた。

しかし、不馬改人は倒すしかないと思った。それは自分が初めて死んでほしくないと願った唯一の存在を殺したからだ。

クラスメイトが死んでも、家族が死んでも何も悲しいとは思わなかった。そんな自分が死んだら悲しいと思った人。

初めて愛した人。心から愛した人。でもその人は殺された。

事故でもなく、病気でもなく、殺された……。

考えていると怒りがわいてきた。

そして、家に帰らずに不馬改人を探しに行った。怒りに我を忘れて

……。

気がつくとも廃墟はいきよとなった工場にいた。

その工場は2 km かける4 km の8 k ? 広い工場だった。

「よくここがわかったな」

突然声を掛けられた。が、見渡してもだれもいない。

「ここだ。上だよ」

言葉通りに上を向くとそこには不馬改人が空中にいた。

なぜだ！？高く跳ぶことはできても浮遊ひゆうはできないはずだ。しかし、実際に空中に浮いていた。

「ククク、『無在』って知ってるだろ？」

「まさか!？」

「その通りだ。俺は魔法の力で浮いている」

こいつも契約者だったとは……。一体どう言う……

「いつまでも会話してると思うなよ!」

いきなり襲い掛かってきたので反応しきれず、攻撃を受けてしまった。

「……………」

「甘いんだよお前は!」

いくら脅威的な身体能力を持っていても、差は必ずある。しかし、不馬改人との差はありすぎる。最初から勝ち目のない戦いということとは覚悟していても、いざ戦うとなると恐怖で動きが鈍る……。

「お前はなぜ僕を狙う!？」

「前にも言ったはずだ!お前は養父じやうふさんを殺したんだああ!」

叫びと同時に振り下ろされた刀は重く、地面に足が沈んだ。

「くそっ」

足は深く沈んでいるためなかなか抜けれない。

その隙に改人は容赦なく攻撃を仕掛けてくる。

強い一撃を受け、体が吹き飛んだ。

そして、コンクリートの壁にぶつかり、体が埋まってしまった。

「おいおい……戦うなら俺を呼べよなあ？こんな面白いことに俺をのけ者にするなんざあ……まあいい、手伝ってやるぜ？」

そう言っつて天ノ姫水城は僕の体を壁から引つ張り出した。

「お前はなぜ僕を助ける？」

「は？そんなもん決まってるだろが。世界はこんなにも美しく、すばらしい。そして、面白いことがたくさんある。お前はその面白いことの一部だからだ」

『世界はこんなにも美しく、すばらしい』か。本当にそうだろうか……。

理解はできたが、いくつか疑問があった。しかし、今はそれどころではない。

「ふん。二対一とはなかなかじゃないか……」

「がああはははは……お前は俺に勝てねえだろ？」

「さあどうかな？」

改人はそう言っつと空中に円を描いた。すると魔法陣のようなものが現れ、その中から幽霊のような何かがあるのが描かれた円から出てきた。

「ほおう。お前も『無在』の第三魔法は使えるようだな」
「第三魔法？」

僕はそう聞くと『無在』の使える十三魔法の3つ目だ。と説明してくれた。

つまり、『無在』は十三の魔法を覚えて、第一・第二・第三……と順に現在使える魔法があり、例えば、第五魔法を覚えるということは第一から第四まで覚えるということらしい。

「ククク、でもその第三魔法は俺の前じゃ意味ねえぜ！」

水城はそう言っただけで空中に円を描いた。すると改人と同じように魔法陣が現れた。

そして、改人の出した幽霊のようなものはその中に消えていった。

「ちっ……」

「ククク……」

「やはり、不魂的ぬげから非生命体は二つ門があるとそこしか通れないのか！？」

「雪宮と言ったか？俺はお前の援護だ。だからお前がそいつを殺れ」

子供のように目を輝せて水城はそう言った。

そして僕は思いつきり刀を振り、その一撃が改人に当たり、改人は吹き飛んだ。はずだった。

「馬鹿め！」

攻撃は命中して手ごたえはあったが、改人は吹き飛んでいなく、そ

こに浮いていた。

驚いていると、その隙にまた強い一撃を受けてしまった。

「ククク、驚くのは無理はない。俺の魔法は態形を維持することだ。まあ、維持だからその場に浮くことしかできながなあ！」

さらに追い討ちを掛けられ、大量に魂を取られてしまった。

「くそお！」

「お前、封印式法ふういんしきほうできねえのか？」

悩んでいる僕に水城は問いかけてきた。

「なんだそれ……ぐあ」

戦闘中に質問はやめてほしい……。が、重要なことみたいだから聞くことにした。

「なんだよ知らねえのかよ！墮おとされた影なのか？」

「だから何だ!？」

「わかった教えてやろう。青い光を全身にまとってみる。そうすりゃわかるはずだ」

言われた通りにしてみると、『式法しきほう』の情報が頭に流れてきた。これはあの声じゃないのか……。そんなどうでもいいことを思った。

「どうだ？わかったかあ？」

「……ああ」

口では説明できないことだった。ただ本能・直感のままに体を動かした。

改人を上に討ち上げ、下に刀で叩き落とし、それを追いかけて落下し、改人が地面落ちるのと同時に刀で突き刺した。

「ぐはっ」

改人が初めて声を上げた。それを聞くと心の奥から勝ったという気持ち溢れてきた。

そして刀に力を込めた。すると、魔法陣のような円が地面に現れ、上空に向かって強い光を放った。

「ぐあああああああ……！！？」

改人の叫びが聞こえたかと思うと光は消え、改人の姿は見当たらなかった。

「勝った……のか？」

「ああそうだ。しかし、本当に『式法』使えるとはなあ」

「？使えなかったかもしれないのか！？」

「ああ」

水城はうなずくとケラケラと笑い、去っていった。

「ふうー」

ため息を吐き、終わったことに自覚を持ち、天を見上げた。

「悲しみはもう……終わった」

しかし、見上げた空はまだ雨が霧のように降っていた。

終わり。

ねえ？まだお話は続くの？

続くわよ。

よかった。

でもお母さんしばらく出かけなくちゃいけないから、しばらくは本を読んであげられないわ。

……我慢するよ。

いいこね。

あーそういえば、お父さんはいつ帰ってくるの？

そうね……。あの人はとてもとても長い旅をしてきて、時間の流れを忘れてるし、今も旅をしているからまだまだ帰ってこないわよ。

そうなの？

そうよ。

ねえ、お父さんのお話してよ。

だめよ。本読んだんだからもう寝なさいね。

はあい。おやすみなさい。

おやすみ。

カナシミナド モウ……（後書き）

第一章読んでいただいて、ありがとうございます。

とりあえず、少し解説をします。

式法とは決まっている魔法で誰でも知識があれば使えます、その決まっている魔法の理解力が高ければ高いほど強力な威力を発揮します。

逆に魔法とは決まっていない魔法で『無在』の契約者しか使えません。威力は契約している『無在』の力で左右されます。

新しい家族（前書き）

前回から 中三〜高二で3年経っています。

本編のスタートです。

主人公は自分は強いと言う自信から、消極的な性格から変わっています。

新しい家族

不馬改人を殺し……封印してから約3年。新しい家族ができた。親の再婚ではなく、僕が孤児院の子を兄弟という形で引き取ったからだ。

雪宮李秋で引き取っているから親には気づかれてはいない。もちろん、別の家に住んでいる。

そして今、その家族の家に向かっている。

血のつながりはなくても心のつながりはある。

その家族は今も女性二人だけだ。別に女好きと言っわけではなく、女性の方が気が合うからだ。

もしかしたら優神雲母さんのことや母がいないことからかもしれない。

「まあ、どうでもいいか……」

つばやき、まだ太陽も昇っていない朝の道を歩いた。

家族の家の前に来た。でも用心しないといけないことがある。

「ピンポン」

インターホンを押ししてしばらくするとダツダツと足音が聞こえてきた。

そして……ドアが外れてこちらに飛んできた。

「うわっ」

「あら？李秋じゃない、どうしたの？」

ドアの下敷きになってる僕に、ドアを飛ばした本人が何事もなかったかのように話しかけてくる。

「またか……」

「また訪問販売の人と間違えちゃった」

「一度も来たことないだろ。訪問販売の人なんて」

この騒ぎはいつものことなのと痛みは感じないこともあって、もうあまり気にならない。

気にならないと言っても、ドアを蹴り飛ばすのは正直やめてほしい。

「今日は早いわね」

「お前は何時に起きてるんだよ……」

「こつちが先に質問してるんだけど！」

「そんなに怒るなよ。……お前が寝てるときならドアが飛んでこないで済むからだよ」

「そんなこと言って寝込みを襲うつもりなんじゃないの？」

「そんな貧相なのを襲うかよ」

「それって私の胸がないって言いたいわけ!？」

まったくうるさいやつだ……。

ゆきみやそく雪宮速、それが彼女の名前。とても足が速いからそう名づけた。

最初は嫌がっていたが今はあまり気にしてないらしく、呼んでも殴らなくなった。

しかし、その代わりにインターホンが鳴るたびにドアを飛ばすようになった。

そろそろ騒いでいる速を止めるか……。

「僕はそんなところは気にしてないぞ。さっきのは嘘だ」

「……あっそう」

実際に速の胸は無に等しい、というか無い。

速は指摘されるととても怒るが、普段は気にしていないらしく、夏に上半身裸でいることがある。

聞いたところ、見られて困るサイズじゃないから別にいいんじゃない？と言われた。

僕としては暑いと脱ぐ癖を直してほしい。一応女性だし……。

「李秋、あんた上がるなら早く上がりなさいよ？」

「ああ。まだ桜は起きてないのか？」

「当たり前よ。今何時だと思ってるの？」

「そうか」

ああ……もう一つ直してほしいことが……。

「ドスン!!」

「うわっ!?!」

「また桜落ちたみたいね」

雪宮桜。毎回ベッドから落ちて目を覚ますことが直してほしいところだ。

「寝相の悪さは直らないのか？」

「直らないわよ？天然だし」

「……」

まあ、床に布団を敷くと寝坊することになるけど……。

とりあえず僕は朝食を作ることにした。

速と桜の朝食は毎回僕が作っている。僕がいないときは桜が作ることになるけど。手を切ったり、火傷をしたりするから心配だ。

……が、桜の方が僕より料理は上手だ。

「速お姉ちゃんおはよう」

「あ、おはよう」

「おはよう。桜」

そういえば桜はいつから速をお姉ちゃんって呼ぶようになったんだろう？

年は桜の方が3歳も年上なのに……。

驚くことにみんな同級生だ。速は天才なので本来は中3だが高2で、桜は留年して高2。

「あ、李秋くん来てたんだ〜！……ごめんねパジャマで」

「べ、別に気にするなよ。一応ほら、家族だし」

「そうだね。あはは」

みんな同級生なのは驚いたが、一番驚いたことは桜の本名は不馬姫^{ふまひ}花^{めか}で、不馬改人の妹だったということ。まだ僕が不馬改人を殺したことは伝えていない。

「桜。料理手伝ってくれ」

「うん」

いつ見ても可愛い^{かわい}な、桜は……。

消極的な性格じゃなくなっただけど、告白するのは少しためらいがある。

「ピンポン」

インターホンが鳴った。……が、今は手が離せない。

それよりも大事なことがある。

「速。ドア蹴飛ばすなよ」

「……わかったわよ」

そんなに残念そうな顔をしなくても……。まあ、仕方ないだろう。速にとってはストレス解消法の1つだ。

「李秋！客よ！」

「あ、ちよつと待ってくれ。桜ちよつと料理やっといてくれ」
「う、うん」

こんな時間に、しかも僕の家でもないのに僕に用があるなんて……まさか！？

急いで玄関に向かうと一人の女性がいた。

「はじめまして、……えっとその、ここって孤児院ですか？」

予感が的中した。やっぱり捨てられた子だった。

「あの……あなたが妙……あつ、李秋さんですか？」

なっ……、僕の本名を知っているのか！？

おしまいよ。

そういえば主人公の本名って出てこないね。確かにそうねえ。

おやすみなさい。

え？……本当にこの本が気に入ったのね。

(そういえば、あの人の本名も知らないわ。

……そんなことも知らないのに結婚してたなんて……うふふ、帰ってきたら聞かなくちゃね)

転校生

僕の本名を知っているのか!?

……そんなはずはない、僕は死んだことになっていないはず。
学校でもあまり名は知られていなかったし……きっと聞き間違いだ
ろう。

「あの、どうかされましたか？」

「えっと、はい、そうです。……さっき言いかけたのは？」

「あ、それは……私の知っている人に似ていたので……」

「そ、そうか」

そう言うことか。しかし、僕の名前を覚えている人がいたなんて。

「とりあえず、上がってください」

「は、はい」

礼儀正しい人だ。しかも美人……どこかの凶暴な人とは違うなあ。
と、思い、ため息を吐いた。

「……あんだ、私のこと考えてないかしら？」

「は？」

「どうせ私と比べてたんでしょ？」

なんて鋭いやつだ。速は僕と同じぐらい人の心を読むのが得意だ。

「あんだ、歯あくいしばりなさい……って、痛み感じないんだっけ
?なら思いつきり殴ってもいいわよねえ？」

「いや、さすがに意識飛ぶって」

そう言っ僕は逃げた。

確かに痛みは感じない。でも、意識は飛ぶ。速の攻撃力は……実際不馬改人より高い。

「逃がすかあああ！」

「うがつつ!!！」

逃げれなかった……。普通の人なら死んでいるだろう。

速にはうわさがある。それは、人体実験の被害者やとある特殊部隊の隊長だとか……。

そんなことあるわけがない。だが速は新幹線並みに足が速い。

魂転者でもそこまで足の速い者はあまりいない。因みに僕は速より足は速い。

速は魂転者かもしれないと思ったが、別の空間（以降、複写空間とする）に連れ込むことはできなかった。

「危うく意識飛ぶところだたぞ」

「あんたが悪いのよ」

まあ、蹴られなかったからマシな方だろう。首が飛ぶだろう。

実際にこの前腕が千切れた。と言っても体から離れたわけではない。3秒ほどで治った。

「李秋く〜ん。料理焦げちゃうよ〜！」

あ！忘れてた。桜は60%の確立で失敗するんだった。

あわてて台所へ走ると、まだ焦げてはいなかった。が、桜は火傷をしていた。

「桜、大丈夫か？」

「うん。火傷しちゃったよ。」

か、かわいい……。ってそれどころじゃないな。

桜の手を水で冷やすため、蛇口に手をのばしたら、出しっぱなしにしてあった油を倒してしまい、駆けつけて来た速にかかってしまった。

「あ、」

料理にかかって火はつかなかったものの、速の感情に火がついてしまった。

「あーんーたーねえー!!!?!?」

「わっ、ちよ、待つ……。うわああああ」

数分後

「結局料理焦げちゃったね。」

「まったく、お前は」

「何よ！その目は！」

お前があんなことで怒るからだよ……………。

「あ、あの」

「ん？」

「私は何をすればいいんでしょうか？」

あ、こっちも忘れてたよ……………。

大体の説明を彼女にすると、本題に入った。

「あなたの名前は？」

「名前……ですか？」

「うん」

「えっと……その……」

ああ、そう言うことか。

捨てられたから、苗字も名前も使う権利はないと思っている。ということはたまにあることだ。

「言いたくないなら別にいいよ」

「あ、はい」

名前は後回しか……。まあ、別に問題はないだろう。

次は学校の転校先だな。

転校しなければならぬ理由は、捨てられたことや面談にこないなどでいじめられる可能性があるからだ。

「転校先は僕が通っている学校か、速たちが通っている学校か、どちらかになるけど、どっちがいいかな？」

なぜ別々かと言うと、速が暴れる可能性があるからだ。桜は速のことを『お姉ちゃん』と親しんでいるので速の通う学校にした。因みに学校は駅から反対方向。

「えっと、では李秋さんの学校をお願いします」

よかった。速のことだからスタイルのいい彼女をいじめる可能性があるからな。

「よし、じゃあ学校に連絡するから少し待って」
「はい」

学校に連絡……今の雪宮李秋の権力ならば、編入試験なしでも転校させることができる。しかも、クラスも指定できる。

やっぱり同じクラスがいいかな。僕のとなりの席の方が名前のこととか、これからのことも話し合える。

学校に連絡をして、お願いすると、即答で了承された。

この学校は金が足りなくて、設備とかが悪くて受験者がどんどん減っていたからなあ。

「あ、そうだ速。この人にこの家の案内してやってくれ」

「何であたしが！あんたがやればいいじゃない」

「僕は料理作らなきゃならないからだ」

「……じゃあ、桜に頼ればいいじゃない」

「桜には料理の手伝いをしてもらう。お前は料理できないし、だいたい覚える気ないだろ？」

「うっ……わかったわよ」

何かと文句を言うてくる速。しかし、あれでも怒っているようで楽しそうな顔をしている。

こんな風に本気で怒れることがなかったのだろうか。

そんなことが感じられた。

確かに最初に会ったときは凄すこかったしな。

「料理作るか。桜」

「うん」

料理の心配は桜だけだが、速の方も気になる……。

なんだか2階、騒がしいな。もうケンカしているのか？

「ちよっ……………！何……………るの！？……………嫌……………！！……………うう……………」
「そん……………めて……………やめて……………！！……………」

どうやらケンカしているようだ。

でも速の聲は動揺しているように聞こえた。

速が動揺している！？…いったい何があったんだ！？

終わり？

そつよ終わりよ。

ちよっと先がきになるよ。

じゃあ？

うん寝るね。おやすみなさい。

おやすみ。

転校生（後書き）

転校生とか言っても学校にまだ行ってませんが
してきしないでください。

タイトル考えるのも結構難しいので。

過去の速（前書き）

速視点です

過去の速

ありえない……。そう思った。

こんなやつが私の過去を知っているなんて……。ありえない。

「な、何言ってるのよ……。!?!?」

「ですから、初めまして城原しろはら美由紀みゆきさん」

「……。!?!?」

何で!? 私の本名を知っているの!?

「……。実際には以前に会ってますけどね」

「あんたなんか私は知らない!」

「覚えてないのも無理はないですね……。本当に覚えていませんか? あなたが組織に入ることになっ

た、あなたに真実を教えて、あなたが組織を抜けることになった原因を作った……。私を」

あの時の!?

確か私が組織に入るきっかけになった事件

私が5才のころ。

「ここはどこ? お母さんとお父さんはどこ?」

あのころの私はそこがどういふ場所かは知らなかった。

「ここはあなたが……。あなたを強くしてくれるところよ」

「そうなの？……お母さんとお父さんは？」

そこには今私の目の前にいる人がいた。年齢は見た目では10代くらい。年を取っていない……。

「あなたのお父さんとお母さんは死んだわ」

「嘘……そんな、何で？」

「事故で死んでしまったわ……」

私はその女にだまされた。実際にお母さんとお父さんは事故で死んでいなかった。

人体実験専門組織の『NON』の人間強化のテストにお母さんとお父さんは使われ、失敗して死んでしまった……。

だまされた私はその実験に使われた。

実験されているときはとても苦しかった。体中が痛く、痒く、暑く、寒くて獣の^{けもの}ような叫び声を上げて、気絶しては起き、気絶しては起き、そんなことが10時間ぐらい続いた。

麻酔^{ますい}は使われなかった。使うと実験の副作用と激しく反応し、死んでしまうらしい。

実験が終わり、気がつく^つくと体が軽く感じられた。周りを見渡すとあの女がいた。

「お疲れ様。辛かったわね……」

その一言に私はさらに洗脳された。

悲しそうで泣きそう^なその顔は演技だった。だけどそのころの私は気づく^くことができなかった。

私は実験成功者01として記録された。

それから私は『NON』に入った。

それ以外私が生きれる道はなかった。

『NON』での仕事は写真と名前と住所の書かれた紙を渡され、その紙にかいてある人物を組織に連れて来ることだった。

私は強化実験でとても速く走ることができ、その分蹴りも強かった。そのため仕事は私にとっては楽だった。

連れて来られた人は別に人体実験に使われるわけでもなく、ただ牢屋むすびやに入れられていた。

牢屋に入れられた人は知らないうちにいなくなっていた。

そのことをあの女に、釈放しゃくほうしたと教えられた。

私はその仕事を『警察のようなもの』と教えられていたため、疑うこともなかった。

私は組織では動物のように扱われ、怒りを感じても抵抗することは許されなかった。それも普通だと教えられていた。

しかし、ある日あの女に事実を教えられた。

「ここに連れて来られた人はね、殺されているのよ。殺されている人はその身に『力』を宿しているの。だから私たちはそれを奪っているのよ」

そう言つて女は高笑いをして、私が何も知らずに人殺しの手伝いをしていたことに恐怖している様子を楽しそうに見ていた。

そう……だから私は組織を抜け出した……。

「うふふ、思い出したみたいですね」

「よくも私を……そんな……ことに……!!」

怒りがわいてきた、私をこんな風にした元凶。それがそこにいる!

「あらあら、勘違いかんちがしてますね」

「何をよ……」

「私は初めましてと言ったんですよ？」

「だから何よ！」

「あなたの知っている人は私の母です。私は母に似ているので、わざとそう言っただけですよ」

母？そんなはずはない、あの女は10代だった。それに私の目の前にいる女を私より年上……ありえない。

「……確かに母は10代に見えますが、当時は28歳だったんですよ」

……なっ!？

思わずたじろいだ。

確かにそう言う人はいるけど、本当にあの女の娘？
だとしたら何をしにきたの？

「……まさか私を……連れ戻す……つもり？」

動揺を隠せず、言葉が途切れてしまった。

「いいえ、違いますよ。私も事実を知り、その口封じに新しい実験体にされそうになったところを逃げてきたんです」

そういうこと？それにしてもあの女、娘まで実験に使おうとするなんて……狂ってる。

今すぐにでも探しに行つて、殺したい。でも、『力』を奪っているなら私より強いはずだし、それに、私は世界の真理を知っているから、殺しても私の立場が悪くなるだけだし、人体実験の被害者をこれから出さないためと言つても、相当な権力を持っているし、世界は子供の言うことなんか信じない。

だから殺さない。

そういえば……李秋あいつも言ってたっけ、『強い悲しみを感じたものは真理を知る。落ちこぼれは世界をより良く変える力があるが、人をだまし、自分にとって有利にことを進める悪党になることが多い。それも真理だ。人間の弱さだ。それが世界だ』って。

私は人の心を読むことは得意だからわかる。李秋あいつが私のためにわざと、イラつくことを言ったりして……そう言う優しいやつだ。だから……好き……。

おしまいよ。

……世界ってやっぱり悲しいこといっぱいなんだね……。

そうねえ、でもきつと幸せがくるはずよ。

でも、そう信じて辛い思いをし続けて死んでいく人もいるよ……。
もう、お父さんみたいなこと言って。そんなこと考えてると、本当にそうなっちゃうわよ。

あ、そういえば『あの女』の娘の人無視されてない？

そういえばそうねえ……って話をずらさないの。

もう寝るね。おやすみなさい。

もう、しょうがない子ね。

(やっぱりこの子はあなたに似ていくわ)

速との出会い

「速。さっきは大声出してたけど大丈夫か？」

2階から降りてきた速に振り向かずと言った。

が、返事はなかった。

これは追及しない方がいいな。

「きゃあっ！」

「どうした？桜」

どうやら包丁で手を切ったらしい。いつものことだが心配だ。

もし指を切り落としたらと思うと母性本能的な何かがかくすぐられる。

「あのさ、李秋」

「何だ？」

生気のない声で速が話しかけてきた。

「えっと、あのときはごめんね。……なんか暴れたい気分だったから李秋を巻き込んでボコボコにしちゃって」

「ああ、そのことならもう怒ってないぞ」

沈んだ気分の速は嫌いだ。いつも笑っていてほしいと言わないでも、辛そうな顔をしているより怒っていた方がまだ。だから……だから僕はわざと怒らせるようなことを言う。そうでもしないと、辛そうな顔をするからだ。

速のことは気にかけている。でも、そんな僕でも速の過去は知らない。

辛い過去を思い出させるようなことはしたくない。
速が自分から明かしてくれるのを待つ。
明かしてくれたら僕は速に認めてもらえたとわかるから。

「そう?」

「ああ、気にしなくていい。大丈夫だ」

「あのさ、李秋。私の本名知ってたっけ?」

「?そういえば知らないな」

どうしたんだ?急にこんなこと言うなんて。

「そうだったけ?……私の本名は城原美由紀よ」

「城原美由紀……あれ?」

「あんた、どうしたの?」

「いや……別に……」

おかしいな。またデジャブ?城原美由紀……城原……しろはら!?
思い出した!そんな感覚を感じた。実際には思い出していないがそんな感覚が感じられた。
すると、速と初めて出会ったときのことが頭に流れ込んだ。

一年前。電柱の影でうずくまっている少女がいた。

僕は辛そうにしている人を見過ごすわけにはいかない性格だ。
だから少女に声をかけた。

「どうしたんだ?」

しかし、返事は返ってこなかった。

「僕はひどいことはしないよ」

「嘘よー!」

二回目はそう返事が返ってきた。

「なぜ……なぜそう思うんだ?」

「みんな嘘つきよ!みんなみんなお互いにだまし合って生きているのよ!」

だまして笑っているのよ!あんたも同じよ!同じ気配を感じるわ!」

ああ……この子は真理を知ってしまったんだ。僕よりすごい反応。きっと辛い思いをしてきたのだろう。

僕なんかたいした悲しみも感じていないのに……。きつと世界には僕以上の悲劇がたくさんある。だから助けたいと思った。

「大丈夫……心配ない。辛……もう大丈夫だ」

そう言って少女を抱きしめた。

少女は大丈夫?と聞かれるのが嫌いそうだった。辛かったねという言葉にトラウマを持っていそうだったから、言わなかった。

「……!?!?……な、何すんのよ!?!」

「安心しろ。僕はいじめない」

「……えい!」

「ぐはっ」

いきなり蹴り飛ばされた。

その後も再攻撃をしようとして体制を整えている。

これは逃げた方がいいかな?

「りやああああ！」

また蹴りが来た。でも、こんどは避けれた。そして少女が空ぶっている隙に逃げた。

僕は普通の人間じゃない。だから追いつかれないと思った。でも、驚くことに少女は追いついて来ていた。

「うわっ!?!」

「だああああ!?!」

叫びながら走ってくる少女は理性を失っているように見えた。追いつかれる……。そう思い推定8階建てのビルの屋上に跳び乗った。

「はあーはあー……魂転者にも体力つてものはあるのに……」

様子を見ようと下を覗のぞきに行った瞬間、少女が屋上に跳び乗ってきた。

「マジかよっ!?!」

「逃がすかあああ!?!」

ありえない。少女は魂転者じゃなかった。

僕はたくさん戦ってきたから、負の感情をもつものと魂転者の見分けがつくようになった。……が、この少女は魂転者ではないのに驚異的な身体能力を持っていた。

「当たれええええ!」

「あぶっ、って、ちよやめ……!」

何とか少女の攻撃を避け屋上から下に跳び降りた。

「ちっ」

跳び降りると同時に舌打ちが聞こえた。

僕は恨まれるようなことは……魂転者はあるだろうけど、恨まれるようなことはない。……やっぱり抱きしめたのがまずかったかな？

「はぁーはぁー、さすがに降りれはしないだろう」

そんな期待とは反対に、少女は跳び降りてきた。

「ははは、もう諦めるか……」

10分後。泣きながら怒り、殴ることはやめたものの。僕は一度気絶したから動けない。寝起きは動けない体質だ。それに少女が上に乗っていて……。

「うう……ごめ……んん……」

「え？」

少女は力尽きて倒れた。

「さすがに体力切れか。とりあえず新しく建てた家に運ぶか……」

それが速との出会いだった。

はい。今日はここまでよ。

うん。おやすみなさい。

おやすみ。

(今日は早く寝ちゃったわね。

そっいえば代ハラしろさんは元気かしら?)

二つの世界（前書き）

二つ目の世界は『未定願』主観です。

二つの世界

速との出会い……それを思い出した。

しかし、その記憶はもう何10年も昔に起こったような気がする。デジャブのような……。

それは優神さんの時と同じ感覚。

でも、僕はまだ16歳だ。何10年も昔の記憶なんてあるはずがない。

「ちょっと李秋？何ボーっとしてるのよ！」

「え？あ、ちょっと考え事してて」

「ふん。それよりさ、もう7時過ぎだけど間に合うの？」

「え？」

台所から出て時計を見た。

「7時!？」

7時過ぎだった。

いつもならもう出ている時間の10分前。

まだ食事も済ませていない。

「7時って……桜、今日は急いで食べるよ？」

「あ……うん」

桜は食べるのが遅いからいつもは早くに作っているのに！

それよりさっきの、あつて何だったんだ？

いやいや、それよりじゃないって。

「あ、李秋。私の少なめにして」

「じゃあ私が食べるね」

「はいはい……。あ、そういえば、あなたは料理少なめにしますか？」

「……名前ないから呼びづらいな。それに……」

「いえ、私は普通でいいです」

同級生に敬語を使われるのは少し変な気分だな。

……つたく速はいつも少なめだな。ちゃんと食べないと大きくなるのになあ。

しかし……あんなに暴れたりするのによくこれだけでエネルギーもつなんて、省エネか？

「あ！こぼしちゃった」

「え！？」

ああ！時間ないのに！こぼすのは計算外だ……。

まあ、水だし大丈夫か。

数分後

「何とか時間以内に食べ終わったな」

「食べるのにそんなに時間かからないじゃない」

「お前は少ないからだろ！」

何で毎回ツッコミ入れてんだらう……。

とにかく、時間以内に食べ終わったし、そろそろ出るか。

「じゃあ、学校行くぞ」

*

「ほう、もう代ハラを思い出すとは……いや、思い出しているわけじゃないか」

「『未定願』。本当にここが気に入ったようだな？」

『無在』か……本当はここはお前の住む世界じゃないがな。

「いいだろう？ここならあいつを観察できるしな」

「おまえは何が目的だ？」

目的……お前に言ってもわかるわけがない。

俺の世界でもわかるやつなんかいなかった……。
目をそらしながらそう思った。

「お前には言ってもわからない」

「……言ってみなければわからないだろう？」

確かにそうだな。ここは賭^かけてみるか。

「……教えてやるう。俺の目的は『断言』^{だんげん}の『カギを与えよう。カギは遊びを終わらせる。しかしお前にカギは見つけられん』を打ち破ることだ」

「……『断言』を打ち破るのは無理ではないのか？」

！？わかったのか？『断言』を知っているのはこの世界にはいいはずだが……。ククク、初めての結果だ。今回は成功するか……？

「まさか『断言』を知っているとわな」
「ああ、知っている。予言ではなく『断言』だろ？確定しているという事だな」

確定している……か、しかしカギはある。見つからないと言つこととで、ないと言つことではない。

ククク、カギは見つからない……ならば、見つからないまま使えばいい。

例えば、誰かが『大声』を出せば扉が開くのであれば、自分はそのことを知らずに『叫べ』ばいいだけだ。

「おい！」

「だれだ？」

「ひでえなあ、自分でやとつたくせによお？」

やとつた……？ああ……

「そうだったな『片目の』」

「天ノ姫水城だ『片目の』じゃねえ」

「戻ってきたと言つことは、何か見つけたか？」

「不馬改人が動き始めたぜえ。封印したはずだけどなあ。あと、あいつがお出ましだぜえ。お前の言つたとおりのやつだ」

「そうか」

しかし、今回は早いな。もう不馬改人が動き出したか。それにあいつが来たか……。

「じゃあ、行ってくるからな『無在』こいつは頼んだぞ」
「どこに行くつもりだ？」

いちいちと質問してくるやつだな。

「雪宮李秋を殺しに行く」

「おい待て！殺すだと？頼むと言っておいて殺すのか！？」

「それはこいつの本名じゃない。その名が本名のやつを殺しに行くだけだ」

「……………」

ククク、今回はあいつの名前を使ったか『優しい悪魔』よ。お前の使う名のやつは俺に殺される……………。

仕方ないことだ。殺したくて殺しているんじゃない。

……………！！こいつの使う名は毎回違う？『定願』の名を使う……………。

『定願』は願いを叶える……………。……………そう言うことか。

ククク、カギのカギは見つけた。あとは俺の得意分野だ。直感で動く！

終わり。今回は少し、謎があったわね。

ねえねえ、カギつてなあに？

カギはねえ、そのままの意味よ。何かを開けるための何かよ。

へ〜。

ほら、早く寝なさい。昨日は早く寝たでしょ？

はあい。

(……………本来あなたはあの人と結婚し続けるべきなのに、私なんかと結婚するなんて……………幽霊の代ハラさん、私は愛する人をあなたから奪ってしまったわ。もう成仏なんて……………できないわよね。ごめんなさい……………)

カギのカギとトビラの前

光と闇とが交差する空間。

不気味とも美しいとも言える空間。

「ククク、久しぶりだな雪宮。何年ぶりだ？」

「黙れ異端者が！……しかし、あいさつはしようか。久しぶりだ。8千4百兆6億2百5十万9千9百9十九年ぶりだな」

……相変わらず細かいやつだな。

それと、相変わらず空間のセンスは悪いな。

どこを見ても同じように広がり、流れている光と闇。

しかし、足場はある。

「異端者よ。なぜこんな世界に歪みの生まれる行為をする？」

「お前にはわからん。……『断言』を知っているか？」

「何だそれは？」

やはりか……。

諦めて、ため息を吐く。その息は白く広がった。

それはこの空間の温度が低いことを教えた。

『定願』は温度を感じないため、息が白くなるかぐらいでしか調べ
る方法はない。

この温度……氷系魔法を使う気か？それともいつものアホで温度
の調整を忘れたか？

「雪宮。また温度調整を忘れたのか？……確か、前に会った時も温
度が低かったが……」

「だ、黙れ異端者！氷系魔法を使うからだ！」

……アホだな。動揺から忘れたのもわかる。それと使う魔法をばらしてどうするんだ……。

この程度なら温度を上げてても気づかないだろう。

「お前は何年たつてもミスが多いな」

「黙れえええ！」

そう雪宮は叫ぶと襲い掛かってきた。

「やれやれ……困ったやつだ」

そうつぶやき、『未定願』は業火を放った。

「ぐあ……っ!?!?……なぜだ!なぜ氷系魔法が使えない!?!」

「やはり温度を変えたことに気づかなかったか……それと自分で暴露したことも気づかなかったか?」

「……っ」

動揺と怒りを見せ、立ち上がる雪宮。だが、膝から崩れ、手をついた。

想像以上のアホだな。いくら強くても、ミスが多ければ意味がない。

「くそお……!」

必死に立ち上がるが、また手をついた。

「俺はお前と話しているうちに魔力を高め、準備をしていた。お前みたいに瞬時に準備した魔法とは格が違う」

「話している間だけでこんな強大な魔法は使えないはずだ！」

「ククク、実はな、お前と会う前から準備をしていたんだ。お前のことだからどうせ空間調整をしていないと思ってな」

ククク、笑いがこみ上げてくるな。これほどうまく行くとは……
ククク。

「その妙な笑い方はやめろ！」
「話を聞け」

話を聞いていないとはもうアホとしか言えんな。

呆れて手を額おでこにあて、上を向いた。

俺の業火を受けて死ななかつたやつは一人だけだ。もう、勝負はついた。

あとは、燃え尽きるのを待つだけ……。

「じゃあな雪宮。聞きたいことはあつたが、さよならだ」

「聞きたいことだと？」

まだしゃべれたのか……聞くとするか。

「ああ、カミ・シャ・ドロクスは元気か？」

「……そいつはもう……死んだ」

「そうか……サヨナラ雪宮」

そう答えたとき、すでに雪宮は燃え尽きていた。残ったのは一滴の涙で固まった灰だった。

悲しいな、かつての友人を殺していくのは……。

それに、もうあいつも死んだのか……ククク、未練だな、こうして毎回灰の塊を拾い、保管しているのは……。

今日はこれで終わりよ。

そういえば、お母さん前にカミ・シャ・ドロクスって言ってたよね？

ああ、それね。彼は私の友人で、昔を思い出しちゃって、思わずつぶやいてしまったのよ。

そんなにいい人だったの？

ううん。最低な性格だったわ。でも、死ぬときに全ての人の憎しみと悲しみを背負って行ったわ。

でも、今は生まれ変わってるけどね。

へ〜。

もう寝なさいね。

はあい。

新学期

「はあ、何とか時間以内に食べ終われてよかったな」

今はもう家を出て、駅までの道を歩いている。

「そうだね」

「そいえば李秋。あんた何で孤児院なんか建てようと思ったの？」

いまさらかよ……もう一年も経つがこんな質問は初めてだ。

「ん？ああ、建てようと思ったのは僕よりも苦しんでいる人たちがいることを知って、助けたいって思ったからだ」

「ふん」

微妙な反応だな。

そんな何気ない会話をしているうちに、駅に着いた。

「じゃあ、またな」

「またね、李秋くん」

相変わらず速は返事をしないな……。

手を振っている桜を眺め、電車に乗った。

「あの、李秋さん。私の名前はどつするのですか？」

あ、そついえばどつしようか。

名前がないのはこちらからも何て呼べばいいかわからない。

「うーん、苗字は雪宮でいいとして、名前は……」

「いいですよ、無理に考えなくても。私は大丈夫ですから」

「あ、ごめん。明日までに考えておくよ」

しかし、困ったことになった。

名前を考えるとときは、相手の特徴などで決めていたから、彼女とは会ったばかりで、よくわからない。

……速は足が速いからで、桜は桜が好きだからで……
だめだ……全然思いつかない。

「李秋さん」

「え、何？」

「私は学校に着いたら何をすればいいでしょうか？」

「ああ、職員室に行かないといけないから僕が案内するよ」

「ありがとうございます」

……とは言ったものの、僕たちは遅刻ギリギリに登校することになるから、

一緒のところを見られるのはまずい。

なぜなら僕が雪宮李秋だということは教師の一部だけだと言つことと、僕と女性が一緒にいると、厄介な連中に絡まれるからだ。

ばれないように校舎に入るにはどうしたらいいのだろう。

裏門は遅刻してくる生徒が遅刻がばれないようにこっそり入ったり、不良の溜まり場のようなところだから無理だ。

正門は遅刻してくる生徒をチェックするため生徒指導の教師がいるため無理だ。

東門は……グラウンドだし、教室から丸見えだ。

いっそのこと気絶さして屋上に跳ぶか……いや、やめておこう。

「李秋さん。どうかしましたか？」

「あ、いや、一緒にいるところを見られるといろいろと厄介だから……」
「……そう言うことでしたか」

ああ……もうすぐ学校に着いてしまふ。

僕の学校は駅を降りてすぐだから、もう時間がない。

あ！そういえば、学校にいるときに警察から犯人逮捕協力要請が来たときに使う脱出路があった！

よし。これで問題は全てクリアだ。

ん？そういえばもう一つ問題があった！

僕は学校では違う名前を使っているから彼女に伝えないと……

「あの、すみませんが、僕は学校では違う名前を使っているので、
宵よひと呼んでください」

「あ、はい。わかりました」

これで問題はもうないだろう。

「じゃあ、先に教室に行ってくるから」

「あ、はい」

職員室に彼女を預け、教室に向かった。

職員室に寄ったので表向きには遅刻だ。

「はあ、こんなことばかりだと単位はとれないな」

孤児の人に入学等のことで学校を休んだりしているから学校では不良として見られている。

しかし、お金は十分にあるため、生活には困らない。

「そろそろ授業が始まるな」

そうつぶやくと、誰かが近寄ってくる気配がした。

振り返ると、学校での数少ない友達の鋼峰こうみね 紀美夜きみやがいた。

「おはよー。ゆ・きみやくん」

「相変わらずだな。あと、『ゆ』と『きみや』に間を入れるな」「いいじゃん。私と同じ名前になるからさー」

彼女とは入学したその日に知り合った。

僕に絡むようになったのは言うまでもないだろう。

彼女はよく男子と一緒にいることが多いが、男子は少しづいと思っ
っている。

もちろん僕もだ。

「ねーねー、ゆ・きみやくん」

「何だ？あと間を入れるな」

「今日転校生がくるんだってー」

「知ってるよ」

……ああ、なんだかお約束みたいになってきた。

「なんだ知ってたの？じゃね、バイバーイ」

嵐みたいなやつだ……。

「よっ、宵。あのさーマジで紀美夜と付き合っ
てねえーのか？」

「何度も言っ
が違っ」

なんだか紹介するのが面倒だ。友人Aでいいだろう。

「相変わらずクールだなお前。あ、そういえば転校生来るんだってな」

「さつき紀美夜に聞いたから知っている」

全くマイペースなやつだ。

僕以外に友達いないのも当たり前だな。

「あつそ。じゃあな宵」

「ああ、じゃあな友人A」

「なんだよ友人Aって！俺は真田^{さなだ}油介^{ゆすけ}だよ！なんでいきなりそんな呼び方するんだよ！」

めんどくさいやつだな。マジで友達僕以外にいないだろう。かわいそうなやつだ。

「ああ、そうだったね？サラダ油くんだったね」

「やめるよ！そのあだ名、お前が言い出したからみんなにからかわれるんだぞ！」

「そういえばそうだったな。愛するお姉ちゃんにも呼ばれちゃったシスコンのサラダ油くん」

「なに暴露してんだよ！シスコンって！」

え！？マジでシスコンだったのか！？

これは重大発表だな。

「……冗談で言ったつもりが本当だったのか」

「え、あ、ちがっ」

このあと、サラダ油は叫びまくって職員室に呼び出され、転校生を見ることができなかった。

「では、真田くんも職員室に行ったそうなので、転校生を紹介します」

先生がそう言うと、生徒たちは騒さわぎ始めた。

そして、転校生が入ってくると男子たちの騒さわぎが激しくなった。美人が転校してきたことに喜んでいるのだろう。

「では、自己紹介をお願いします」

そういえば、名前ないのにどうやって自己紹介するのだろうか？

「あの……私は雪宮です。事情があって今は名前はありませんがよろしくお願いします」

よかった、ちゃんと自己紹介ができた。

「えーっと席は、雪宮育くんのとなりが空いているのでそこに座りなさい」

なぜか、先生がそう言って、彼女が座るとざわざわとなった。会話を聞いてみると……

「ねえ、雪宮って雪宮育と苗字同じよね？」

「うんうん。しかも席となり同士だよ」

という会話が聞こえた。

しまった。苗字が同じなのを忘れていた！

はい。終わりよ。

今回は学校？のお話だね。学校って楽しそうだね。

そうね。私たちには学校と言つものがないからね。

私学校に行きたいよう。

そうねえ。お父さんならできるかも知れないわ。

本当！？早くお父さん帰ってこないかなあ。

うふふ。もう寝なさいね。

はっい。

平和

苗字が同じだった！

心の中で叫んだが、すぐにその不安は消えた。

なぜなら雪宮という苗字は孤児院にいる子供の約半分につけていたため、

この地区では有名な方だからだ。

そんなことを考えている内に1時間目は終わっていた。

当然のことだがクラスのほとんどが転校生に話しかけている。

いきなり大勢に話しかけられて戸惑うのも無理はない。

それからも休み時間になる度に話しかけられ、4時間目には結構やつれていた。

助けたいという気持ちはあるが、そんなことをしたら敵意のまなざしを向けられるようになるだろう。

「ねえ？ゆ・きみやくん」

「何だ？」

僕が心配そうに見ていたら前の席の紀美夜が話しかけてきた。

「ゆ・きみやくん。転校生に興味があるの？」

「いや、興味というよりは心配だな」

やや怒り気味に尋ねてきた。たぶん他の男子よりもかまってくれる僕にかまってもらえなくなるかもしれないと言う嫉妬だろう。それよりも間を入れないでほしい……。

「心配？」

「ああ、見た感じ結構疲れているからな」

「やっぱり優しいんだねー」

「やっぱり？」

やっぱりと言う言葉に疑問を持った。

僕は誰にも優しくした覚えはないからだ。

「うん。だって中学生のころ不良に絡まれてたとき、助けてくれたから」

「そんなことあったか？」

「あったよ。それに、ゆ・きみやくん雪宮李秋なんでしょ？」

「！？」

僕はあまりにも突然だったため、絶句した。

なぜ知っているんだ！？と何度も心の中で言った。

「やっぱり……そうなんだね」

パニック状態になっている僕を見て紀美夜は言った。
もう、ごまかすことはできない。

「いつ……気づいた？」

「おい、鋼峰。授業中だ、前を向け」

「あ、すみません」

……聞き出す前に先生に注意された。

いったいいつから気づいていたんだ？

幸い、生徒が結構騒いでいたため、さっきの話は聞かれていないようだ。

そのまま授業に集中できずに終わりを告げるチャイムが鳴った。

「やっと昼休みか……」

空腹は感じなくとも、体は食べ物欲している。
複雑な気分だ。

そんなことを考え弁当箱を取り出そうと思い、かばんを開けたとき、外から聞き慣れた声が聞こえた。

「秋ー！！弁当箱ー！！」

速の声だった。

その言葉を聞いてかばんの中を見たら、弁当箱が無かった。

「秋！窓開けてー！！」

言われるままに窓を開けると、速がジャンプしてちょうど開けた窓から教室に入ってきた。

「秋！私のかばんに間違えて入れたでしょ！？」

「あ、ごめん。……わざわざ届けに来てくれたのか？」

「そうよー！」

周りを見てみるとみんな驚いてこちらを見ていた。

いきなり女の子が3階の教室に飛び込んでこれば驚くだろう。

「ゆ・きみやくん。この子だれ？」

「えっと、妹みたいな関係……」

「妹なの？」

「っ……」

強い口調で問い詰められ、動揺を隠せない。

「違うわよ！私は義理の妹よ！」

「そうなの？」

「そうよ！」

「へえー」

助かった……。

あとで色々と要求されそうだ。

無茶なことを言わなければいいが……。

「ところで名前は？」

「雪宮速よ。……あんたこいつの彼女？」

「違うわよ」

「そう」

なんてこと聞いているんだよ……。

まあ、何とかかなりそうだし大丈夫か。

「ちょっと！何のさわぎですの！？」

少し落ち着いてきたところに、僕が一番恐れている人の声が聞こえた。

「あら？李……宵。こんなところで会えるなんて奇遇ですわね？」

来てしまったのか！？戸葉瀬 母音。

「まさか、年下……それも同じ学校の生徒だったなんて驚きですわ」

お母さん？寝ちゃったの？

あら？ごめんね。少し疲れているのかしらね？

お母さん大丈夫？

大丈夫よ。ほら、もう寝なさいね？

うん。おやすみなさい。

師匠

来てしまったのか戸葉瀬 母音!?

「何で姉さんがここに……!?!」

と驚いたように言ったが、この学校にいることはすでに知っていた。

なぜならこの学校に入ったときにチラツと姿を見たことがあるからだ。

「あら?風紀委員ですから騒がしいこのクラスに注意をしに来ただけですわ」

しまった!もう見つかってしまったか……。

ああ、今まで築き上げてきた学校でのイメージが崩れてしまっている。

「ちょっと秋!この女だれ!?姉がいるなんて聞いていないわよ!」

「いや、これは……姉というわけじゃ」

「あとで聞くわ!……それよりあんた誰よ!?!」

何であとで聞くって言うておいて別の人に聞くんだよ……。

それより早く速を止めないとまずい!

「年下にあんた呼ばわりされるのは少々腹が立ちますわね……いいですわ、もう闘気があるようですので相手をしてあげますわ」

「わかってるじゃない。それならボコボコにしてあげるわ!」

ああ……予想どおり闘うつもりだ。

「ちょっと待て！姉さんと闘っちゃだめだ！」

「なっ、何だよ!？」

「いいから早く学校に戻れ！」

「……わかったわよ。戻ればいいんでしょ！」

そう言っつて速は窓から飛び降りようとした。

「あ、速。弁当ありがとう」

「なっ、……言っつのが遅い！」

「ごめん」

何とか止められた……。

姉さんと闘わせるわけにはいかないからな。

姉さんと言っつても実でも義理でもない。

単にそう呼ばされているだけだ。

「あああら。せつかく久しぶりに手ごたえのありそうな子でしたの
に。……まあいいですわ。宵が同じ学校の生徒だとわかりましたし、
かわいがれますわ」

ひどく背中に悪寒が走るのを感じられた。

もう僕の平和な日常が終わりだ……。

「宵。まだ次の授業まで10分もありますし、私と少しつきあいな
さい」

「え!?!ちよっ引つ張らな」

「あら、何ですの?」

「いえ、何でも……」

姉さんのことだから放課後までつきあわされるに違いない。
でも、逃げることは無理だ。

「あなたと会うのは久しぶりですわ。ゆっくりお話ししましょう」

「あの……姉さん。そろそろそのしゃべり方やめませんか？」

「やめるつもりはありませんわ。お母様との約束ですから」

「そ、そうですか」

なぜこんなにもおびえているかと言うと、昔、まだ優神さんと出会っていない小学生のころ。僕は姉さんによくかわいがられていたからだ。

姉さんは幼稚園のときから合気道と柔道を習っていて、誰も逆らう人はいなかった。

でも恐れられていたわけではない。
なぜなら、とてもやさしく、気が利いて、みんなを笑顔にしていたからだ。

僕とは違う学校だったが、町では有名人で友達のいない僕にまでその情報は届いた。

でもなぜ僕がそんな人にかわいがられていたかと言うと、学校の帰りに偶然姉さんとすれ違うときに、ぶつかったけど謝らなかつたことが一番の原因で、姉さんはいいい人でい続けることにストレスがたまっていたときに僕が偶然にもぶつかったからだと言っていた。

それから一年経って姉さんとは仲良しになり、合気道を教えてもらう師匠と弟子の関係になった。

しかし、小学校を卒業してからは全く会わなくなった。

そして僕が魂転の能力を手に入れたあと、また姉さんと会った。
姉さんは以前よりはるかに強くなっていた。

久しぶりに手合わせをしたが、魂転の能力を得ているにもかかわらず攻撃を当てることすらできなかった。

全ての攻撃を完全に読まれ、なすすべなく負けたあと、また弟子になっただが、雪宮 李秋とばれてしまい、弱みをにぎられまたかわいがられることになった。

修行はとても厳しく、後ろで落ち葉を落とすのを目をつぶって取ると言っものだった。

中学を卒業してからまた会わなくなり（犯罪者逮捕のため1年ほど費やしたため、姉さんとは1学年離れた）高校に入学して今のこの状況にある。

「そういえばあなた……魂転者ですわね」
「なっ!?!」

突然の言葉に少しの間言葉を失った。

「ですから、わたくしも魂転者ですわ」

おしまいよ。

……………

あらあら。途中で寝てしまったのね。

（本当にかわいい子。

早くお父さん帰ってくるといいわね。）

少しずつながらも世界は変わってゆく

「よお『未定願』。情報を持ってきてやったぜえ」

「水城か。お前も苦労しているな」

「へっ、苦労はしてねえぜ。むしろ面白くて楽しいぜえ?」

「……そうか」

全く変わったやつだな。

まあ、その方がいいか……

「どうやら、どんどん不馬改人が活発になってきてやがるぜえ」

「ククク、予想どおり事が動いているようだ」

「まあ、俺もこいつがどうなるかは楽しみだが」

「お前はもう好きにしろ」

「なっ……!?!?」

相変わらず今回も同じ反応をするな……

そう何度も繰り返す世界は本当に変わってきているのか?

呆れた顔で上を見上げた。

だが、そこには永遠と同じ空間が広がっている。

万華鏡のように合わせ鏡をしたような風景。

永遠と続くその光景はまさにこの世界のようだった。

「言った通り、好きなところへ行け。不馬改人と手を組ぶのもいいだろう」

「俺はもう用済みってことかよお!」

「ククク、用はまだある。それはお前が考えてすることだ。指示を出す必要はない。お前が思った通りにしろ」

「……いいだろう、やってやるぜえ。だがその前に聞きたいことが

ある。本当にこれでいいのかあ？」

「いいさ、これは『予言』だからな。必ずしなければならぬ」

所詮しよせんここまでしか合っていないからな。

あとは今回の『予言』を遂行すいこうするしかない。

そんなことを考えているうちに水城は無言で去っていった。

「もう行ったか……なら」

「ふふふ、わかっておる。我が主あまのじよ」

「詠歌えいかか。今呼ぶところだった」

「当たり前のこと。毎回同じ時刻に我を呼ぶ」

「そうか」

もう数え切れないほど繰り返しているからな。

わかって当然か……

「それにしても主よ、暫時ちか考えておったがもっと美しい我が名はなののか？」

「時を詠み、歌う……お前に合っているではないか。それとも『母はは体制たいせい』の方がいいか？」

「……っ。仕方あるまい、詠歌でよい」

俺が創ったとはいえ、こんな性格の女になるとは……

短くため息を吐き、顔に手を置いた。

「……それで、今回は本当に『母体』なのか？」

「うむ、こやつ以降『予言』が頭に入っただけ」

「そうか。……それよりこいつはまた同じことになるのか？」

「どうしても避けることはできぬ。我も心痛むが仕方あるまい」

「……そうか」

どうしても避けることはできない。いや、どうしても避けてはいけないと言う方が合っているか。

またこいつに悲劇が訪れるのは俺も心が痛むな。

顔に置いていた手を下ろし、下を向くと、下も同じような空間が広がっていた。

が、自分の足場に小さな黒い光が少しずつ増えていた。

なるほど。『黒光』があるということはやはり『母体』か。

「ククククククク……。これは楽しみだな」

蝉せみのような笑い声が永遠と静かに響く。

『黒光』もそれに答えるように静かに揺れ、変わらず少しずつ増えていた。

はい。今日はここまでよ。

お母さん。

どうしたの？

『黒光』ってなあに？

黒い光よ。

こんなの？

え！？いつからできるようになったの！？

うーと、なんとなく今できるようになった。

そう……とにかく今日はもう寝なさい。

はい。

(やっぱりあの人の子ね。でも、嫌な予感がするわ)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9616v/>

「未定」の書

2011年11月20日13時01分発行